

令和元年度

第2回 静岡県総合教育会議

議事録

令和元年9月3日（火）

第2回 静岡県総合教育会議 議事録

1 開催日時 令和元年9月3日(火) 午後2時から4時まで

2 開催の場所 県庁別館8階第1会議室A、B、C

3 出席者 知事 川勝平太
教育長 木苗直秀
委員 渡邊靖乃
委員 藤井明
委員 加藤百合子
委員 小野澤宏時

地域自立のための「人づくり・学校づくり」
実践委員会委員長 矢野弘典

4 議事

- (1) 第1回協議事項に関する実践委員会からの報告
- (2) 生涯にわたり学び続ける教育の充実
- (3) その他

事務局： ただいまから第2回総合教育会議を開催いたします。
本日は、お忙しい中、御出席賜り、まことにありがとうございます。
私は、本日司会を務めます文化・観光部総合教育局、伏見と申します。
よろしく願いいたします。
本日は、伊東委員が所用のため欠席となっております。
本日の議事は、「第1回協議事項に関する実践委員会からの報告」
「生涯にわたり学び続ける教育の充実」であります。
開会に当たりまして、知事から御挨拶申し上げます。

川勝知事： どうも皆様方、残暑厳しい中お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。
また、地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会委員長の矢野委員長にも御出席いただきまして、誠にありがとうございます。
今日の議題は、「第1回協議事項に関する実践委員会からの報告」と「生涯にわたり学び続ける教育の充実」でありますけれども、第1回総合教育会議の協議事項として、県立高校における魅力ある教育環境の充実に関する伊東地区の新構想高等学校の改編の話題につきまして、7月30日に実践委員会が開催され、そこで実際に視察されました委員長を初め委員の方々を中心に、たくさんの御意見をいただいたというところでございます。これが突破口になって、新しい高校の在り

方について、形になっていけばいいなと思っております。

実は昨日、理容師・美容師の世界大会で世界1位になった日本チームにお会いしまして、6人1組なのですが、その中で4人が静岡県出身なのです。一人が女性、あとは男性の方です。何しろ世界一ですからすごいです。富士山を見ていると、やっぱりカットも富士山のようなかなと思いますが、それはともかくとしまして。お一人お一人に、いつ理容師・美容師になりたいかと聞きました。女性の方は、小学校6年の時に考えていたとの事です。あと一人の方は中学生。もう二人は、高校に行かれまして、17歳の時に決めたと仰っています。ですから、大体15前後で決まると。小野澤委員は、幾つの時にラグビーをやろうと思ったのでしょうか。

小野澤委員： 私は大分遅かったですね。スポーツ選手なんて運の要素の方が強いので、プラスアルファぐらいでしか考えていなかった。

川勝知事： 大体決まったのが幾つぐらいですか。

小野澤委員： 選手というのは、実は社会人になってからです。

川勝知事： だって、大学でやっていたではないですか。

小野澤委員： 大学でもプレーしていましたが、そこもまだ趣味というか、まだプロみたいな形の契約形態もなかったのので、普通に社会人としてサントリーに就職して、4年目に初めて、雇用形態で契約社員みたいなものができるよというのができたので、そこで変えたのです。

川勝知事： なるほど。ですから、25歳、あるいは26歳ということですよ。

小野澤委員： そうです。

川勝知事： ですから、30にして立つということがあるわけですが、大体そのころに決まると。ですから、私は昔、15で元服と言ったのは、本当に大したものだなと感じております。前髪を切って大人扱いにするわけですね。ですから、そのころまでに、あるいはその前後に自覚を高めて、この道で行こうと、あるいはこの道しかないと決める人がいる。

あとは、就業時代でできるかできないかというのは、もちろんいろんな環境もありますし、小野澤さんのように、色々な条件が整って、よしこれで行こうとなさったと。それでもやっぱり20代の前半ですから、人生の生きる道を、いろんな道があるということと、それと理容師とか美容師というのも世界一になったら憧れの的ですから、これは非常に立派なものだということで、そういう社会総がかり、地域ぐる

みで、色々な才能を持っている人が自分の道を見つけられるように、なるべく早くに見つけられるように環境を整え、そして失敗を許して、30前後になるころには大体決まると。35歳以降の失敗は自己責任と。それまでは社会が寛容な精神を持って、その成長を見守る。こういう社会をつくり上げていければいいなと思っております。

その意味で、中卒で高校に進む方たちの高校の在り方というのはとても大事で、これまでのような型にはまったようなものを変えていくべき、今、時期に来ていると思っております。

それでは、今日は2時間用意していただきまして、委員会や事務局、ありがとうございました。よろしくお願いを申し上げます。以上でございます。

事務局： ありがとうございます。
次に、木苗直秀教育長から御挨拶いただきます。

木苗教育長： 皆さん、こんにちは。教育長の木苗でございます。
皆様には、令和元年度第2回の総合教育会議に御出席賜りまして、ありがとうございます。

本日の議題であります「生涯にわたり学び続ける教育の充実」につきましては、7月に開催された地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会において熱心に御協議をいただいたところであります。矢野先生を初め委員の方々には厚く御礼を申し上げます。

今回の議題である論点の1の「確かな学力の向上」では、教育委員会が全国に先駆けて取り組んだ静岡式35人学級の下限撤廃が今年度、小学校と中学校の全学年で完成したところであります。

また、過日結果が明らかとなりました本年度の全国学力・学習状況調査では、適切な結果の分析により、課題を把握するとともに、速やかに授業改善を図るべく対応してまいります。全体として成績は極めて良かったと思っております。

今後においては、各学校の特色においた個性、あるいは取り組みを進めており、さらにSociety5.0に向けて、先端技術を活用した学びの在り方の変革が課題となっております。

また、論点2の「ライフステージに対応した教育の充実」については、大学等における社会人の学び直しへの関心が高まる中、教育委員会においても、ICTを活用し、生涯にわたって学び続けるための学習情報の提供を行っているところであります。

いずれも現在の社会情勢に即してございまして、時を得た論点あります。本日、皆様には、忌憚のない御意見を交わしていただきまして、より良い教育につながるよう議論を深めていただきたく、よろしくお願いいたします。ありがとうございました。

事務局： ありがとうございます。
それでは、議事に入りたいと思います。
これからの議事進行は川勝知事をお願いいたします。

川勝知事： ありがとうございます。
それでは、次第に基づきまして、本日の議事を進行いたします。
まず1つ目の議事は、「第1回協議事項に関する実践委員会からの報告」についてであります。
事務局から資料の御説明をお願いします。

事務局： 第1回協議事項の論点2. 県立高校における魅力ある教育環境の充実に
関する伊東地区新構想高等学校への改編につきまして、事務局から説明
いたします。

別冊の参考資料の1ページを御覧ください。

ふじのくに魅力ある学校づくり推進計画では、その計画の中で新構
想高等学校計画を示しています。そのうち伊東地区につきましては、
2ページに記載のとおり、伊東高校、伊東高校城ヶ崎分校、伊東商業
高校が対象校となっております。

2では、対象校3校の募集定員や学級規模などの概要比較を示して
おります。現在、伊東高校城ヶ崎分校には、東部特別支援学校伊豆高
原分校が併置されております。

3ページを御覧ください。

(2)は、第2次長期構想策定時の平成17年と現状との比較であります。

学級数、教員数はそれぞれ減少しておりますが、(3)にあるように開講
科目数は増加しており、教員の負担が大きくなっていることが伺えます。

(4)は、現場の教員の声を取りまとめてあり、教員からは、地元の
期待に応え進学実績を維持する必要はあるが、授業、補修を組む上で
教員の手が足りない状況である。新構想高校の開校時期が延びたら延
びるだけ学校の体力を失っていくという不安がある。地域の子は地域
で育てるというコンセプトで教育の質を維持して欲しいなどの意見が
出ております。

4ページは、意見交換の開催状況を取りまとめてあります。

昨年7月から、同窓会等の関係者と意見交換等を開催しております。
その主な意見としましては、5ページに記載のとおりであります。

小・中学校長からは、新子構想高校の施設面、部活動は、親も子供
たちも興味を持っており、施設は改修し、拡張するなど、魅力化を行
って欲しいなどの意見がありました。

伊東高校同窓会では、城ヶ崎分校の少人数教育も良いが、小、中、
高校と段階的に刺激を増やした環境に置くことも大事であるという意
見がある一方で、せっかく城ヶ崎のような環境の良い所にあるのだから
生かすべきとの意見もありました。

福祉関係者や保護者からは、共生・共育は小・中学校から行っており、高校で分ける理由はない。卒業後の人生も考え、多くの人と自然な場で交流すべきである。学校規模が大きくなることによるいじめや差別が心配であるなどの意見がありました。

市内中学校PTAからは、具体的な高校の内容がわからないと進路決定ができないので、令和5年開校は約束して欲しいという意見もありました。

このように、各意見交換会では、新構想高校への改編について様々な意見が出されております。

6ページは、伊東市内の中学生と、その保護者、小学校5・6年生の保護者を対象に行ったアンケートの結果であります。

どのような高校に進学したいかという質問に対しては、「進学が実現できる高校」という回答が飛び抜けて一番多く、また、どのような特色ある高校に進学したいかという質問に対しては、「施設・設備が充実している」が一番多く、「自分の得意とするスポーツ・文化的活動が盛ん」「学校行事に特色がある」の順で多くなっております。

7ページは、城ヶ崎分校の保護者を対象に行ったアンケート結果であります。

城ヶ崎分校の良い点、魅力につきましては、少人数のため、きめ細かく目が届く。一人一人に親身になって相談に乗ってくれる。アートコースという他には無い専門的な授業が上げられました。

一方で、改善して欲しい点などでは、少人数の良さを期待したが、子供にとって今は苦痛のようだ。勉強や進学についての情報が少なく、のんびりしているので、もう少し頑張らせてもよいなどの意見がありました。

新構想高校については、生徒の減少は避けられないので、今以上に専門性の高い教育環境があっても良い。進路や学びたいこと別に選択できれば、大人数でも色々関わり合いができ、刺激があって良い。学校に自分の居場所が見つけられると良いなどの意見がありました。

また、8ページは、伊東市内3校を再編し、新構想高校に東部特別支援学校伊豆高原分校を併置する案、9ページは、伊東高校、伊東商業高校を再編し、城ヶ崎分校に東部特別支援学校伊豆高原分校を併置する案の概要を示しております。

以上で、事務局からの説明を終わります。

川 勝 知 事： ありがとうございました。

それでは、実践委員会を代表して矢野委員長から、実践委員会での報告内容に触れていただきながら、御意見をいただきたいと思っております。よろしく申し上げます。

矢 野 委 員 長： それでは、実践委員会の論議の内容について御報告をしたいと思います。

ます。

資料の1ページ、「第1回協議事項に関する実践委員会からの報告」を御覧いただきたいと思います。

第1回総合教育会議の協議事項「国内外で活躍できる人材の育成」の論点2、県立高校における魅力ある教育環境の充実の中で、伊東地区新構想高校への改編について話題が上がりました。そのため、前回の実践委員会では、この話題についてさらに踏み込んだ議論をするということで、実際に新構想高校の対象となる伊東高校、伊東商業高校、伊東城ヶ崎分校と伊豆高原分校を視察した委員の方々を中心に、また他の委員の皆様からも広く意見や御提案をいただきました。実際に視察をいたしましたのは、私を含めて4人でございますが、どういふ議論があったかを御報告します。

まず、商業高校と伊東高校との統合によって、産業界との繋がりによる深い学びが実現できて、将来に可能性のある新しい学校になっていくのではないかと。あるいは、伊東地区の自然環境や資源を活かして、静岡県独自の教育を推進する新しい学校をつくるという視点で考えていくと良いのではないかとといった特色のある教育内容についての御意見をいただきました。

次に、新構想高校に城ヶ崎分校と伊豆高原分校を併置することにつきましては、城ヶ崎分校と伊豆高原分校のそれぞれの特色を考慮し、多様性を活かすという観点で、当面存続させるべきであるという御意見。また、城ヶ崎分校や伊豆高原分校がこれまでに積み上げてきた独自性を残していこうという観点から、学校規模が小さくても、学校の特徴や多様性を活かすことを考え、その学校が持つよい芽を潰さないような配慮が必要ではないかという御意見。あるいは、分校であるからこそ生まれる生徒たちの気概、これを大事にするべきではないかという御意見がありました。

また、伊豆高原分校の生徒には、ゆとりのある敷地を利用し、農業を通じて地域とのつながりを持って学んで欲しいといった御意見もいただきました。

もちろん、共生・共育という教育システムは誠に有意義な取組であります。現地を視察した実践委員会からは、伊東地区の場合、画一性と多様性をどのように両立、調和させていくかという観点から、また教育の弾力性によりまして、それぞれの子供たちの学習意欲を高め、教育レベルを高めていくことをもっと考慮すべきとの御意見があり、実践委員会では、参考資料9ページの別案を支持する意見が多数ありました。

ここで、画一性と多様性という言葉を申し上げましたが、これは子供の数が減ってまいりますので、統合して良い、効率的で内容の深い教育を施すという意味で、それはまさに本筋を行く議論ではありますが、同時に伊東地区の特殊性とか個別の事情も十分配慮して、柔軟な

対応が必要であります。そういう意味でも、地元の意見をよく聞いて対処していくことが重要であります。

この資料1の丸印3つ目に書いてありますように、統合することによって成功したケースもあります。これは駅南にあります駿河総合高校がその非常に良い例です。特別支援学校と普通科高校の生徒達と一緒に勉強しています。色々な意味でプラス効果の出ている例であると私は思います。

一方、伊東の場合は、場所が離れているということもありますし、今ある分校の特殊性というものが相当皆さんのプライドの元になっておりますし、それぞれの大きな効果を上げておりますから、そういう点について、多様性を活かすという観点で、当面存続させるべきであるという意見が実践委員会では強かったということです。

また、これに関連しまして、すぐに新構想学校として統合するのではなくて、時期を見ながら一緒にしていくことが良いのではないかとこの統合時期に関する御意見もありました。

そして、伊東高校と伊東商業高校にそれぞれ建設する際のメリットとデメリットがあるため、建物の工夫をして進めてもらいたいといった校舎や敷地に関する御意見をいただきました。

以上が、実践委員会での協議内容の御報告でございます。

川 勝 知 事： ありがとうございました。
 それでは、御意見を皆さんからいただきたいと存じます。
 では、藤井さん、お願いします。

藤 井 委 員： 今、この伊東高校というか伊東地区の高校の再編に関して御説明いただきましたが、当初の予定議題に関わらず、この点についてお話をするとということでしょうか。

川 勝 知 事： そうです。

藤 井 委 員： それでは、敢えて申し上げたいのですが、総合教育会議というのは、個別の事案に関して各論を評価する場ではないと思います。したがって、色々な意見があって当然である中で、私からコメントを差し上げるとするならば、統廃合だとか移転の事案がある時に、教育委員会、行政の立場から考える極めて基本的な筋、或いは方針といった考え方に関して少し触れておきたいと思います。

当然のことばかり申し上げることになって恐縮ですが、いずれにしても、まずは安全性を何事にも最優先するという取組は貫かなければいけないと思います。その上で、発想として、今あるものをどうするかということではなくて、その地区、あるいは地元にとって将来どうあるべきか、将来像をメンバーがしっかり協議して結論を出していく

という態勢が欠かせないと思います。言い換えると、短期的な考え方ではなくて、あるいは落としどころを探すのではなくて、あくまでも長期的な視野、観点に立ってベストな選択肢を検討するということが必要だと思います。

一方、色々な意見が出ることによって、部分最適を追求しがちな傾向というのは出てくるとは思いますが、あくまでも全体最適を基準に全ての答えを導き出していく姿勢が必要だと思います。いずれにしても、痛みを伴わない変革というのはあり得ないので、地元の方、関係者の意見を十分に聴取して、その痛みが最少となるような工夫をしていかなければならないと思います。

統廃合、あるいは移転というのを単なる機会ということで検討するのではなくて、その機会を利用してどういう特色ある学校づくりをしていくか構想をしっかりと練っていくことが大変重要で、それを示すことによって、地元に対して説得し、あるいは先導的に働きかけていくということが必要だと思います。

冒頭に個別の案件について評価する場ではないということをお申し上げしましたが、敢えて今申し上げた特色を出していくという点で伊東地区のことを考える場合には、既にアニメを中心としてアート美術関係ということが一つ具体的に出ていると思います。その他に観光学なども出ていると伺っています。一方で、医療関係についても意見があるような話も伺っておりますし、私としては、せっかくそういうことを考えるのであれば、地区の特性としてはジオパークが関連しているので、それこそ地質学に関連したような特色付けをすることもできるでしょうし、もっと総合的に長期的に考える場合には、伊東に限った話ではないですが、こういう事案があった時に、新たな特色として、IT技術、IT機器を最大限に駆使した先進的な学校体制を追求するというのも一つのチャンスだと思います。

色々な選択肢というか特色の可能性というのがあると思いますので、良い意味でとんがった学校づくり、あるいは出っ張った学校づくりというモデルを伊東地区が先進的に成し遂げると、素晴らしいことになるのではないかなと思います。

今申し上げたようなことを推進していくには、予算付けというのがどうしても現実的な要素として欠かせないので、この点では、痛みを伴う色々な改革をしていく中で、政策的・戦略的な予算付けというのは必要だと思いますし、同時に伊東に対して、あるいは移転、統廃合する地区に対して、先進的な教育のできる優秀な先生方を優先的に配置していくような工夫も必要だと思います。

思いつくままに言いましたが、今回の統廃合に関して様々な意見が出ていることを承知しつつも、敢えて違う切り口からお話をさせていただきました。以上です。

川 勝 知 事： 藤井委員、ありがとうございました。

他にいかがでしょうか。

芸術、それからジオパークなどの観光で生きているまちでありますし、一方、医療の不足のところもございますので、今回の統廃合については、こういう話は部分的には出てはいますけれども、枠組みとしては旧来の統廃合に少し変更を加えたあたりのところが今メインの話になっています。高校の統廃合に関わることでございますので、伊東の個別事案に関わらなくて言っていただければと存じますが、いかがでしょうか。

では、渡邊さん。

渡 邊 委 員： 私も昨日、藤井委員、小野澤委員と一緒に駿河総合高校を拝見させていただきました。また、過去に教育委員をやらせていただいている中で、様々な特別支援学校ですとか、併設している高校にお邪魔させていただいたこともございます。そういう中で、先生方に本音として、一緒にやっていくことについてどう考えていますかと伺ったところ、実は障害のある子供たちと健常な子供たちが共に学ぶという環境があるということで、思わぬ相乗効果が生まれていて、とてもやって良かったなと思うことがたくさんあるということを伺うことが多いのです。

私としては、今後、インクルーシブということで、健常な人とそうでない人が共に生きていくという、学校だけではなくて共に生きていく社会をつくっていくという観点からしますと、なるべく早期に子供たちが共生・共育に慣れていく、学校生活で自然とお互いに対する思いやりが生まれていく場になっているということがとてもすばらしいなと思っているところでございます。

以前、特別支援学校に通う児童生徒の保護者の方と、障害のあるお子さんを育てるといのは大変なことですねというようなお話をしたことがありましたが、保護者の皆様、口々に仰るのは、こういう子が社会の中にいるということを皆さんに知っていただいて、自分がいつまでこの子を守ってやれるかわからないので、社会の方に理解していただいて見守っていただけるような、共に生きていけるような世の中になっていってほしい、そういうことのために、この子供たちは生を受けたのだと、そのように信じていますという言葉が非常に重く私の中に残っております。今回、新たに共生・共育を目指した学校が生まれていくということに対しては、期待を持って見守っているところでございます。

さらに、私たちは、高校の改編、学校の改編というような言葉を使っていますが、単に統廃合して学校の数を減らしていくという意味ではなくて、地域の方と共に新しい学校をつくっていくのだと、そういう思いで取り組んでいる部分が大きなところなのです。ですから、先ほど藤井委員が仰ったような新しい切り口で学校の特色を出していく

ということを地域の方にお示ししながら、また地域の方の御意見を聞きましても非常に期待が高いのかなと感じています。私自身も伊東地区で子育てをしている友人に聞いても、今度、新しい高校がもしできたとするならば、幼保の小さい幼いころから、小・中、そして高校に向けて伊東を一本に繋ぐようなすばらしい教育の流れができていくということにとっても期待しているというようなことを言うPTAの関係者もおります。そのような気持ちを酌みながら、新しい学校をつくるというような気持ちで取り組んでいけたらいいなと思っております。以上です。

川 勝 知 事： どうも良い御意見をありがとうございました。

基本的には、健全者も障害者も共に生きる、これが基本的な姿勢ですね。それを学校の社会においても貫くということですが、これに加えて、従来の小、中、高、大学、大学院云々とか、この路線と、その傍らに新しい学びの場と就業の場というのがあって良いということをございまして、もっともな御意見だと存じました。

では、加藤さん。

加 藤 委 員： 高校の統廃合をしなくてはいけない背景を皆さん忘れてはいけません。人口は減りますので、この事実を受け止めなければいけないというところは前提としてあります。意見をさらっと拝見すると、どうしても先生の視点がなくて、先生は大変だというのはたくさん書かれていたと思いますが、運営上無理があるというのは背景としてあることを、教育委員会、或いはここにいる人たちが一生懸命訴えないと、教育を受ける側は、そんな税金なのだからやってくれよと、そういう姿勢になるでしょうから、しっかりこちらの先生側も、こういう事情でしっかり見える化して大変な状況についてコミュニケーションをとっていかなければいけないのかなというのが一つです。

あとは、藤井委員や渡邊委員も仰っていましたが、閉塞感というのが保護者の中にもあると思います。今までどおりの教育に何か明るい兆しが見えないというのは皆が思っているので、こういう新しい構想が来たときに、本当に期待感があるのだと思います。

ですから、2つにするのか、1つにするのか、とにかく新しい体制になるのであれば、新しい未来を少し感じられる、明るい未来がここに来ると見えてきて、子供たちがわくわくしながら通えるような、先生たちがわくわくしながら働けるような、しっかり運営、ソフト側も整えて、構想の中に入れて出発しないと、余り物理的に統合しただけで、人口減少だからと言うと、また更に暗くなってしまうので、明るい未来を感じる構想になればなと思います。

川 勝 知 事： 期待感が非常に強い地域ですからね。そういう明るい希望を描ける

ような構想が、この教育委員会から出ればいいかと存じますが、いかがでしょうか。

小野澤委員、お願いします。

小野澤委員： 私も昨日、施設を視察に行きました。私たちが想像する以上に子供には対応力があるというか、こんなことがという以上に、健常者の高校生の方が個性をすごく認め合って、このところは僕らでは勝てないから彼らの能力をみたいところ、例えば作業のところなど非常に協力し合って、長所をお互いに引き出し合っているという感覚があったので、時期としては決して後ろにずらさずに決めたところで開校し、そのためには安全面というのをしっかり確保しながらやるということがすごく重要だと思います。共生・共育を開校と同時期に始めていくことで、我々が思っている以上の変化というのを生み出せるのではないかなというのは、昨日の視察で感じた部分です。

川勝知事： さすが監督ですから、高校生を見る目がしっかりしてしまっていて、高校生になるとしっかり周りのことを見ているということを見ていただいたということで、先生のことを加藤さんにいただきましたけれども、生徒さんのことを小野澤委員からいただきました。一渡り意見をいただきましたので、木苗先生からこの件について御発言をお願いいたします。

木苗教育長： ありがとうございます。私も皆さんの御意見を聞いていて、なるほどというのと、私は皆さん以上に現場を歩いて、そして尚且つ子供たちともよく話をしますので、それで色々なことを感じておりました。

静岡県は、御存じのように、これまで共生・共育を積極的にやっています。今20校ぐらいありますが、駿河総合高校は、御存じのように普通科高校と特別支援学校の生徒たちが一緒になって、全く違和感がなくやっています。静岡県は共生・共育を売りにしていると言うと変ですが、全国でも相当前を向いて走っていますので、それなりに評価はされていると思いますし、その理念につきましても十分に皆さん認識しておりますので、今後もさらに共生・共育を推進していくものと考えております。

新構想高校につきましても、私も現場へ行きました。ただ、伊豆半島ですので、他地域と違いの平地ではありませんので、統廃合して建物を建てるにしても、そう大きなものはできないというような制約があったのも確かだと思います。

それから、地域の人たちが、過疎化しているということも含めて、この際、自分たちも色々なことに協力するから是非進めて欲しいと、相当地元で話し合いをやられています。そしてまた生徒、それから地域のニーズも多いし、今日も伊東の市長さん、教育長さんも来られましたけれども、色々御意見も伺っております。あちらにも行きます

し、向こうからも来ていただくというようなことでやっていますが、いずれにしましても地形を考えると、やはり安全第一というのも考えないと大変なことになります。

既に、実践委員会を含めて、様々な御意見をいただいておりますので、そのような御意見、それから今いただいている御意見も総合して、県教育委員会としてはある一定の方向性をできるだけ早く出してまいります。そして、誰が見ても、最終的には皆さんが納得していただけるような魅力ある学校づくりというものを積極的にやっていきたいと考えています。以上です。

川 勝 知 事： 一応まとめていただきましたので、教育委員会の方向性が出るのを温かく見守るといふことにしたいと思っております。もし何かこの件につきまして更に御発言があるなら。よろしいですか。

それでは、次の議題に移りたいと存じます。「生涯にわたり学び続ける教育の充実」でございます。

事務局から資料の説明をしてください。お願いします。

事 務 局： 事務局から説明いたします。

お手元の資料の2ページを御覧ください。

資料2に、本日の協議事項、生涯に学び続ける教育の充実に関する論点を記載してございます。

技術革新やグローバル化の更なる進展等により、様々な変化が予想される中、誰もが生き生きと活躍し、豊かで安心して暮らせる社会を実現するためには、生涯にわたり主体的に学び続けられる環境の整備が必要です。

生涯を通じて「才徳兼備」の人材を育む教育を推進していくためには、論点として事務局から次の2点を御提案させていただきます。

1つ目の論点は、確かな学力の向上でございます。

確かな学力の向上に向けて、新しい時代に必要となる資質・能力を育成し、きめ細かな教育を進めるためには、具体的にどのような取り組みが考えられるか、御意見をいただければと存じます。

2つ目の論点は、ライフステージに対応した教育の充実でございます。

それぞれのライフステージにおいて、誰もが必要な知識・技能を身につけ、自らの可能性を最大限に伸ばすことのできる教育を実現するために、具体的にどのような取組が考えられるか、御意見をいただければと存じます。

なお、この2つの論点につきましては、それぞれ検討の視点を記載してございますので、この検討の視点も御参考にしていただければと思います。

次に、別冊の参考資料を御覧ください。

まず、論点1. 確かな学力の向上に関する資料です。

別冊の10ページを御覧ください。

確かな学力の向上について、県の取組事例をまとめてございます。

11ページを御覧ください。

静岡式35人学級編制の充実についてでございます。

平成28年度までは、1学級人数の下限を25人と定めていました。平成29年度から段階的に下限を撤廃し、平成31年4月に全学年の下限撤廃を完了いたしました。

12ページを御覧ください。

総合的な学習の時間には、探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通してより良く課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成することを目指しています。

13ページを御覧ください。

魅力ある学校づくり推進事業についてでございます。

本事業では、技芸を磨く実学の奨励、知性を高める学習の充実、グローバル教育の推進により、県立高等学校の三道の鼎立を図っています。

昨年度は、15ページに記載のとおり、民間熟練技能者を活用した指導、県内大学における専門教養講座の受講、地元自治体、企業、市民等との連携による地域の課題把握と改善方法の提案、イングリッシュキャンプの実施等を行いました。

16ページを御覧ください。

来るべきSociety5.0に向け、「人間の強み」を発揮してA I等を使いこなす人材育成を促進するため、先端技術を活用した学校における学びのあり方の変革を図っていきます。

今後の取組として、外部有識者等の参画も得ながら、授業改善に取り入れられる先端技術などの検討及び試行を行い、ICT活用と人材育成を推進していきます。

19ページを御覧ください。

小学校英語教科化への対応では、研修を通じて教員が指導力及び英語力の向上を図るとともに外国語教育の推進者を育成することで、外国語教育における小学校から中学・高校までの一貫した学びを実現していきます。

20ページを御覧ください。

全国学力・学習状況調査についてでございます。

小学校6年生及び中学校3年生を対象に、教科に関する調査と生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査を実施しています。

21ページを御覧ください。

全国学力・学習状況調査を活用した取組についてでございます。

本県では、全国学力・学習状況調査後の自校採点による実態把握や分析に基づき、教師用コンテンツを配信するなど、授業改善を図っています。

また、結果公表後においても、学力向上連絡協議会において課題に

対する有効な方策を示すなど、W-P-D-C-A改善サイクルの実施により、学力の向上を図っております。

22ページは、全国学力・学習状況調査を活用した具体的な取組内容を示しております。

23ページを御覧ください。

調査結果の公表についてでございます。

33市町全てが、実施要領に基づき、結果分析や改善方策等を公表しております。

24ページを御覧ください。

平成31年度の全国学力・学習状況調査の結果についてでございます。

3の(1)の学力に関する調査では、それぞれの問題数を100点に換算したときの割合で表示しています。

25ページに参りまして、(2)が学習状況に関する調査結果を示しています。

26ページを御覧ください。

論点2. ライフステージに対応した教育の充実に関する資料、大学などにおける社会人の学習に関する考え方についてでございます。

内閣府が実施した生涯学習に関する世論調査によりますと、大学を出て一度社会人となった後に、大学などの学校で学習したことがある、学習してみたい人の割合は36.3%となっております。社会人の大学などでの学習に期待する成果は、幅広い教養を得ることのほか、資格を取得すること、特定分野の先端的・専門的な知識を得ることなどが高い割合となっております。

29ページを御覧ください。

29、30ページは、ライフステージに対応した教育の充実について、県の取組事例をまとめてございます。

31ページを御覧ください。

静岡県生涯学習情報発信システム(まなぼっと)についてでございます。

I C Tを活用し、県民のいつでも誰でもどこでも生涯にわたって学び続ける意欲を高めるため、子供から成人までの学習情報を一元的に提供しております。

32ページを御覧ください。

しずおか県民カレッジ開設事業についてでございます。

多様化・高度化した成人の学習意欲に応える学習情報を提供するため、県、大学、民間教育事業者等が行う講座等を集約し、インターネットを通じて情報提供を行っております。

34ページを御覧ください。

県内高等教育機関における社会人への学習機会の提供についてでございます。

社会人を対象とする学習制度としては、社会人特別選抜入試や社会人聴講生など、各種制度を定めています。

また、ふじのくに地域・大学コンソーシアムでは、静岡の地域資源を生かし、魅力発信につながる研究内容をテーマとして、複数大学の連携による公開講座を実施しております。

35ページを御覧ください。

職業能力開発短期大学校の設置についてでございます。

グローバル化や科学技術の進展に対応できる技術人材を育成するため、沼津技術専門校及び清水技術専門校の教育内容を高度化し、短期大学校を設置いたします。「現場に立って、自ら考え、行動できる人材を育成」を基本理念に、令和3年4月に開校予定です。

37ページを御覧ください。

平成28年度に策定した第10次静岡県職業能力開発計画を着実に推進し、県民全体の活躍促進及び技術・技能尊重の社会づくりに取り組んでいます。

38ページに記載のとおり、主な取組として、オーダーメイド型の在職者訓練、企業とのものづくり人材育成協定の締結による在職者訓練などを実施しています。

41ページを御覧ください。

41ページからは、新産業に係る人材育成についての資料です。

41ページは、医療機器開発をリードする中核人材養成、43ページは、地域機能性食品等の開発を行う人材の育成、44ページは、レーザーによるものづくり中核人材の育成の取組についての資料でございます。

45ページを御覧ください。

高等教育機関における小・中・高校との連携についてでございます。

ふじのくに地域・大学コンソーシアムでは、高校生に高校と大学との学び方の違いを体験する機会を提供するため、大学教員による高校への出前出張講座や大学生による高校生とのワークショップを開催しています。

また、静岡県立大学、静岡文化芸術大学では、小・中学生を対象として、キャンパスツアーなど、大学を知る機会の提供を行っています。

46ページを御覧ください。

理数科や職業系専門学科等を設置する高校と大学との連携を一層強化し、高校生に、高度な学問の一端に触れたり、研究体験や活動を行ったりする機会を提供しております。

次に、47ページから54ページにかけては、県教育振興基本計画における生涯にわたり学び続ける教育充実に関連する施策と、その位置付けについてまとめてございます。

以上で、事務局からの説明を終わります。

川 勝 知 事： ありがとうございました。

それでは、矢野委員長から、実践委員会での協議内容に触れていただきまして、御意見を頂戴したいと存じます。

矢野委員長： それでは皆様、本編資料の3ページを御覧いただきたいと思います。各委員の皆様からいただいた色々な意見を総括してまとめております。4ページ以降には、このもととなります具体的な御意見をそれぞれ掲載しております。ここでは3ページを中心に御説明いたします。

まず、論点1でございますが、意見を5つにまとめております。

最初に、授業でITを活用し、個人やチームで課題を解決していくような学習は実社会で役立つ能力を養えるといったことや、子供の自発性を伸ばす教育は、子供にとって学びが楽しくなるのではないかと、新しい時代に必要となる資質・能力を育成する観点からの御意見をいただきました。

また、論理的思考力と国語の能力の相関性から、国語を学ぶ目的と学ぶことによって何の役に立つのかが見えてくるのが大切なのではないかと、御意見もありました。

次に、子供たちの優れた能力をさらに伸ばすために、学校の中に異文化を身近に感じさせるきっかけや工夫があると、子供たちの世界が広がり、人生が楽しくなることを感じてもらえるのではないかと、御意見がありました。

次に、企業と連携した人材育成についての御意見として、学生時代から実社会で生かせる能力を育むために、学校だけではなく、企業が学生に対してもっと色々な経験やチャンスを与えて、彼らに自信を付けさせていくことが大切なのではないかと、御指摘や、指導者育成の観点からは、13歳から18歳くらいの能力をどのように伸ばしていくか。また、それを見られる指導者が必要であるといった御意見をいただきました。

続きまして、論点2でございますが、意見を4つにまとめております。

まず、社会人が大学や大学院へ進学する際の支援につきまして、職場から学びへの橋渡しができる専門的な塾や講習の開設などのバックアップがあれば良いのではないかと、御提案。更には、より専門的な学びを求める人に対しては、社会人が受けられるような専門講座を県でバックアップしていくような体制づくりの必要性、その下にありますが、県内の大学でインターネット等の講義により修得した単位を認めて、卒業や学位を取得できる仕組みづくりなど、これからの時代に即した幅広い学習機会の提供について御提案をいただきました。

続いて、社会人が安心して学べる環境づくりの観点から、育児と学びの両立を実現できるよう、高校や大学といった高等教育機関における託児所の設置を充実させるのが良いのではないかと、御意見もいただきました。

最後に、高等教育機関と初等・中等教育との連携の在り方でございますが、小学校や中学校でプロジェクト・ベースド・ラーニングを進めていく中で、大学教員や大学生が子供たちの気付きにヒントを与え、学び

をサポートするような関わりが持てる仕組みにしていくと、子供たちの学力はもっと伸びていくのではないかといった、子供たちの能力を更に伸ばしていくための仕組みづくりへの御提案がありました。

去年から始まった取組として「未来を切り拓くDream授業」があります。私は、去年都合が悪くて出られませんでした。今年講師として初めて出て、中学1・2年生と接しました。本当に受け止め方が素直で率直で、ここが一番大事だと思うことは完全に把握してくれているのです。本当に感激しました。12歳、13歳の子というと、私自身は何だかまるで遠い昔に置き忘れてきたような存在に見える時もありますが、本当に頼もしいなと思ひまして、この子供たちをしっかりと鍛えて立派な人に育てたいと確信しました。その御報告をしておきます。

それから、こちらに様々な資料がありますが、県、市町の教育改革の強みは、やはり現場を持っていることです。大学ももちろんですが、高校、中学、小学校、現場を持っている強みというのは本当にすごいことでありまして、将来の方向を色々考えながらも、具体的な小さな一歩で良いから、それを記していくことが大事ではないかと思ひます。それが物事を長期的に変えていく唯一の道ではないかと思ひます。昔から、真理は細部に宿るといいますが、本当にそうだと思ひます。小さな具体的な内容を変えようとする努力がなくて、将来の大きな方向を変えることは非常に難しいと私は思ひます。

それから、前回の実践委員会では学力調査の有効活用について十分な議論がされておられません。これについては、次回の実践委員会で、少し皆さんの意見を得たいと思ひております。

実践委員会としては4年経ちましたが、検討委員会の時から一貫して言っておりますことは、とにかく小さなことから始めよう。始めたことが逆方向を向いていたら意味がありませんが、大きな方向に間違いがなければ、小さいことから始めて、ある意味では試行錯誤も含めて、それを積み上げていってだんだんと大きくしていく。そうすると、ある時間が経過すると、何か大きなものが実ってくるのではないかと思ひます。そのようにして教育改革を進めていきたいと思ひますし、私も実践委員会の皆さんとは、そういう点で合意しまして、具体的に何が出来るか、これをテーマにして、そしてそれに基づいて、この総合教育会議で御報告を今後ともさせていただきたいと思ひております。どうもありがとうございました。

川 勝 知 事： 矢野委員長、ありがとうございました。
それでは、この件に関しまして、どうぞ御自由に御発言ください。

藤 井 委 員： 確かな学力の向上の点について、一つコメントさせていただきます。
毎回同じようなことを申し上げていますが、今の教育がいかに時代遅れであるかということを私自身痛感しております。先程の資料の説

明の中でやっと色々出てきたという感じを受けていましたが、Society5.0に向けた人材育成のためのICT活用ということがいよいよ少しずつ動き始めたかなと思います。

なぜこの点について申し上げたいかというと、結局、ICT機器を使った教育、あるいはそれを普及させる色々な整備努力というのが、なされていることはわかりますが、極めてスピード感に欠けており、諸外国と比べると日本が極めて立ち遅れていて、周回遅れどころか2周回遅れぐらいのイメージを持っています。ですから、大げさに言うと、先進的な国々から見れば20年遅れている現状だと思えます。

そういうことを踏まえた上で、人工知能を含むIT技術、IT機器のフル活用による基礎学力の向上ということを実際に考えなければいけない時期に来ていると思えます。

教育の現場に人工知能をどうやって導入するかというと、なかなかイメージが湧きにくいと思いますが、簡単に言うなら、タブレットを目前にして人工知能が展開する色々な質問やコメントなどに対して、生徒が一人ずつ個別に対峙して学んでいくというやり方です。諸外国、中国なども含めてですが、相当進んでいるという認識でいます。

これをやるメリットというか、効果というのは非常に多岐に渡ると思えます。順不同で思いつくままに申し上げると、まずはタブレットを使うことは、別にタブレットではなくてパソコンでも何でもいいのですが、子供たちが親しみを持って使ってくれるということ。また、習熟するまで人工知能が繰り返し反応してくれるということ、遊び感覚で基礎学力をいとも簡単に身に付けることができるということ。それから、人工知能は多人数を相手にするのではなくて、1対1で対応できるので、個別指導が十分に行き渡るというメリットがあります。更に、子供たちが慣れ親しむことによって自発性を持つことにも繋がっていくと思えます。そして、教える側も学ぶ側もデジタルリテラシーが高まっていくというメリットがあります。

すごく現実的に言うと、そういった学習を積み重ねていくと、定期テストって恐らく要らなくなると思えます。それから、先生方の精神的かつ物理的な余裕が間違いなく生まれてくると思えます。そうすると、そうした時間的余裕を情操教育の充実に振り向けるだとか、あるいは課題解決型の教育を導入することによって、コミュニケーション能力の増強、思考力やディベート力の向上ということが考えられます。それから、教育に関連したビッグデータを間違いなく蓄積することができるので、それを活用した色々な取組ができることにもなります。ひいては、AI人材の育成にかかわる裾野が広がっていくということも考えられます。さらに考えていくと、例えば教室とか、職員室の空間が広がる。空間が広がるというのは、要するに紙が基本的にほとんど要らなくなるわけなので、すっきりします。尚且つ、スペースもそんなに大きいものは必要としなくなり、美化にも繋がっていくと

ということがあります。

こういうことを考えていくと、基礎学力の向上だけではなくて、生徒たち、或いは先生方も含めてですけれども、人間力の向上に繋がるということで、もっと先を読むと、そういうことが魅力的に県内で進んでいくと、人口の流れにも変化が出てくるのではないかなと思います。ということで、一石十鳥以上の効果、色々な効果が期待できるわけですので、是非IT技術、IT機器を使って人工知能をフル活用しながら、基礎学力の教育を改革していきたいと思います。

同時に、そういう新たな教育の手法を取り入れる中で、行政の立場から教育産業の育成、あるいはそういったデジタル機器を使ったり、ソフトを提供したりする企業とのタイアップによっていろいろな工夫をしていくということが考えられると思います。特に、現在は県庁もそうですし、学校の現場もそうだと思いますが、デジタル機器の恐らくリースというのはほとんどやっていなくて、みんな買い取りで10年、20年使って、陳腐化して、やっと取りかえるというようなパターンだと思いますので、そういうものを製造している企業とのタイアップをすることによって、例えばパッケージを組んで、教育に関連する用途で使う場合には市価の例えば半額で提供できるとか、あるいは5年ごとに機器を入れ替えて、使い終わったものは教育分野で発展途上にある国に輸出するなり、あるいは寄附をして現地で有効利用してもらおうとか、色々な取組が考えられるので、そういった面からも、ICTの導入に関しては工夫の余地がまだまだたくさんあると思っております。以上です。

川 勝 知 事： ありがとうございます。
 他にいかがでしょうか。
 では、小野澤委員お願いします。

小 野 澤 委 員： 私の子供がそのような感じでやっています。スマイルゼミみたいなのでやっていて、やはり他の時間が少ないので、復習するのも紙とかではなくて、実際に自分のパーソナルで組み立ててくれるとか、今週何分学習しました、今月この科目をダウンロードしていませんといった情報が親の方にも来るのです。でも任すかみたいな感じです。

藤 井 委 員： それは学校の授業と関係ないのですか。

小 野 澤 委 員： 学校の授業も、結局学校が選んでいる教科書を最初に登録すると、その予習・復習みたいなものを全て教科ごとに何かという形で、全部の教科書が網羅されているような状態なので、一回やってみるかみたいなことでやっていて、そうになると、親の意識としては次どうなるのかとなると、そことは違う時間を家の時間で使おうとなるのです。

ですから、今回マレーシアからの留学生をホームステイで今ちょうど一週間になるのですが、先々月もイートンのイギリスの子を2人という、より体験みたいなことに時間を使いたいというのが親の時間で、そこにやはりより積極的になれるというメリットがあるのかなというのは、実際、親目線としてはあります。

二つ目として、生涯学習の資料で知らなかったことが色々ありました。私も社会人4年目にプロ契約という契約形態に変えましたが、実際に今でもずっと学校に行っています。教員免許も取りたいというのもあって、科目生だったり、社会人聴講生だったりという形で、もう妻からは大分あきれられていて、もう十五、六年、まだ行くのなんて言われて。最初は、教員免許の取得のために科目生で全部単位を取りためて、もともと文学部だったので、体育系の単位を全部取って、通信の単位も全部取りました。大学自体も3つ、4つ行ったのかな。その後、筑波大学の大学院も行きまして、日体大でもという形で行って、現在も色々学んでやっています。だから、この辺も興味あるなと思いました。

ただ、そのように自分が社会人になって行くときに、金銭面のことで妻に言われました。教育は子供という視点がやっぱり親にあるので、どうしても「あなたはそんなに学費を払うの、今年も」というところに、「済みません」となる。せめて通学の学割でもあればいいのですが、意外と社会人の学割って余り変わらなかったりするんで、学生証を持っているので、映画がちょっと安くなるとか、それぐらいで、意外と肩身が狭く、自分の学びに時間とお金を使っているという状態があります。ただ、すごくいい情報なので、また見返したいなと思いました。以上です。ありがとうございました。

川 勝 知 事： 大変いいお話ですね。
では、渡邊さん。

渡 邊 委 員： 今、小野澤委員から体験のお話が出たので、ちょっと私も幾つかアイデアを述べさせていただきます。

英語教科化に対応した外国語教育の充実という分野について、私も小学校の外国語活動に携わる身として、学校の教室の中でやることに非常に限界を感じる部分があります。どうしても興味を持たせたいと思っても、集団で一緒にやるという部分で、教科の教授というような、興味を引きつけるというところにおいて、教室の中ではやはり話したいという、話さなければ、英語でコミュニケーションをとらなければいけない場を設定するというのが非常にハードルの高いところでして、今後外国人の先生たちにも御活躍いただく場として、生きた英語を学ぶということで、実技科目を英語でやるというようなところをもう少し厚くしていくといいのではないかと思います。

例えば、三島市が個別にやっている事業ですが、英会話スクールの先生にラグビーが得意な人がいらっしゃるということで、英語でラグビーという行事があります。ですから、例えば体育を英語でやるとか、以前、西伊豆町でも、バスケットの得意な先生が子供たちに英語でバスケットを教えたという経験もあります。あとお料理を英語でやるとか、音楽を英語でやるとか、そういう生きた英語を浴びる機会というものを学校の中で設けるなど、内外にかかわらず設定してあげられると、単なる教科としての英語ではないところで学びが深まるのではないかなと思っております。

もう一つは、学力の向上のベースとして、先日、三島市のPTA連絡協議会で花まる学習会の高濱先生という方をお招きしました。その方は、都会で子供たちの学力を伸ばすということを専門にやっていますが、やはり学力が伸びるためには、その子供がもともと持っている原体験というものが非常に大事になってくるということでした。いかに幼少期に自然の中で自分の体を使って活動しているかということが、実際教科を学ぶときの底力になっていくというようなお話でした。

都会に住んでいる方々は、自然が少ない環境なので、わざわざ長期のお休みの時に田舎に連れて行って、盛大にキャンプをやるという形で自然体験をさせるのですけれども、静岡県はまだまだ身近なところに自然がたくさんあります。そういう自然体験を通じて子供たちが自ら学び、自ら感じたことというのを蓄積していくことが、将来の学力の向上につながるので、保護者はそういうところ、小さいときから英才教育をするということで学びに触れさせるのではなく、まずその段階を踏んで、子供の発達の状態に応じた体験をさせていくということが大切ですというお話でした。そうだとすると、社会教育ですか、生涯学習分野と連携をした啓発も必要になってくるのかなと思いますので、やはり静岡式で、静岡の子供たちが豊かな自然体験をもとに、大きくなったら学力が伸びていくような体系的な学びのスタイルができるといいかなと思っております。以上です。

川 勝 知 事： ありがとうございました。
 加藤委員、お願いします。

加 藤 委 員： 確かな学力の向上では、渡邊さんが仰ったとおりだと思います。やはりベースは、よく遊ばないと私は伸びないと思っています。なので、低学年は学校できちっと遊ぶという感じで良いのではないかなと思っています。その後、きちっと体系立てた学習が必要だと思いますが、一つ今の学校の問題点、前々から申し上げていますが、先生たちが勉強が嫌いとか、学習が嫌いと言ってしまうたり、態度に示してしまったりしているというのがそもそも良くないかなと思います。

やはり学習とか、知ることと違って楽しいことだし、世界が広がっていくという体験をすると、どんどん知りたくなって、それで小野澤委員はずっと学校に行っていると思うのですが、本当にそうだと思うのです。

自然の知的欲求って、多分子供たちの方がもともと強く持っていて、それを封じてしまっているのが結構大人たちだと思います。特に私などは、リケジョというくくりを言われてしまいますが、子供のころに、まだまだ静岡県内だと「女の子で理系？」みたいな、「女子が東大？」みたいな、そういうのはいっぱい言われますし、小さい子も既に小学校の時点で、「そんな子はかわいくないものね」といった先入観を既に植えつけられているというのがあるので、やはりそこは社会の力というか、先入観をなるべく与えないで、どうやって子供たちが学習というのを、知ること自体が楽しいのかというのを、本当にそこだけを教えれば普通に伸びていくのではないかなと思っています。では、学校でそれをどのようにやっていくのかというのが、いつもはっきりと言えないところが本当に歯がゆいところですが、やはり少なくとも先生たちが勉強して楽しいよねという姿勢を俳優になった気分で示してもらえるだけでも違うのではないかなと思っています。

あと、ライフステージにという点でいうと、私も工業から農業に入ったときに静岡大学にお世話になり、とても良かったです。地元出身でもないところを静岡大学の講座に通うことで、県の方にもお会いしたし、今大分お世話になっている鈴与さんにもお会いしたし、色々な方にそこで接することができて、本当にそこが起点になっています。私は週に一回、工業の仕事をやりながら水曜日だけ半年間通わせてもらいましたが、色々な人たちが社会人になって、ちょっと興味を持った時に、気楽に少し頑張れば違う世界に触れられるという講座がもう少しあれば良いと思います。

小野澤委員： それは、日中ですか。

加藤委員： 日中です。夜でも良いと思いますが、私は子育て中だったので、日中で助かりましたけど。ですから、いろんな選択肢が用意できるというのは、やはり社会の豊かさを示すことになるのかなと思います。今日は本当にすごいメニューがたくさんあったので、素晴らしいなと思いつつ、このままメニューを減らさずに継続できることを願っています。以上です。

川勝知事： ありがとうございます。

これからAI、ICTというのは、不可欠の社会に生きていくツールになるので、小さい時からそれに親しむと。それが、この教育現場にどういう影響というか、教育現場はそれをどのように受け止めるか

ということですね。ですから、旧来の白板・黒板を背にして子供たちが1人の先生を注視して見るというような、こういう授業のスタイルというのがもう時代遅れになるということを見越した上でAI、ICTを、それからそこにいらっしゃる先生の役割をどうするかということの考えにまでならないと、少なくとも自分のタブレットでそれぞれ遊んでいたらしようがないので。ですから、そこにきちっとしたプログラムなりが背景にあって、そこで自由に色々と学べるということですから、先生の役割はきちっと必ずやるというふうに思いますけれども、どういう先生像が必要かということが、やはりこれからAI、ICTの時代には構想していかないといけないと思います。

それから、もう一つはグローバル化といいますか、英語のことが出ていますけれども、実践委員会でも矢野委員長からちょっとありましたが、各クラスに一人外国人がいるだけで全く違うという、それをやってみたらどうかということで、例えば静岡県35市町ありますけれども、例えば静岡県は日本のカリフォルニアと言われるそうです。要するに、褒め言葉なのです。それで、35市町のうち8つの市町がカリフォルニアと姉妹関係を持っています。

カリフォルニアといえば、もちろん大きいですがけれども、スタンフォードのような、文字通り若い青年たちが大きな事業をしています。これは、実は大学の基本方針でもありまして、はっきり言うと実学をやっているわけです。どのようにするかと言うと、今、光創成大学院大学でやっている色々なのと似たような哲学ですが、ただ、もう全部自由に全てのことについてやるということで、そういうところの文化を持つ大学、まちとか、他のところとうちの市町が関係を持っているわけです。ですから、お招きすると、こちらも行く。先生方が向こうに行って、向こうの授業の仕方は全然違いますから、向こうの方、中学校の子がこちらに来て、カルチャーインパクトを与えると交流になると思いますが、このいわゆる対外的な交流をやっていかなければいけないし、eラーニングのように、スタンフォードのプログラムで、例えば島根県、鳥取県、川崎市、広島市、プラスどこかが向こうの教育プログラムに基づいて、選ばれた30人の人たちに英語で教育するわけです。そういうのも提供しているわけです。ですから、我々今、小・中・高等学校でやっているような教育とは全然違うようなことが起こっておりますので、ですから、教育委員会も覚悟してやらなければいけません。

それからもう一つ、生涯学習については、小野澤さん御自身がやっておられる、誠に立派なことだと同時に、御令息が、そういう新しい情報機器を使ってみずから学問しているというような、こういう時代ですね。先生の役割は、もうここでははっきり言って要らないのかもしれない。

しかし、例えば、藤井さんが以前仰っていた、寄宿舎のような形で

の教育ですね。学校というのは安全なところにあるので、春休み、夏休み、冬休み、それからもちろん土・日・祝日という時には子供は学校から帰れます。あとは学校が預かって、食事もそこで出すとなると、やはり行儀作法とか、色々なことを四六時中、いわば教育できるわけですね。そうした形で、要はハードのインフラも活用できるということもありますので、今日ここに出ている、どのようにして学んでいくかというのは、今ゼロベースで考えても、転換点にあるのではないかと思っています。それから、体を動かすことと頭脳の活動とが連動しているということで、そのためには体を動かせるような自然環境であるとか、あるいはスポーツであるとか、そういう課外の環境が静岡県は恵まれていますので、それをどのように人材育成に活かしていくかということです。

それから、また大学にいろいろ、結局大学でBAとか、MAとか、PhDとか、これは全世界共通です。静岡高校を出ているとか、清水東を出ているとか、そのようなことは世界に通じません。だけど、大学の学士号というのは世界共通です。だから大学というのが、もっと社会人に対しても、また小・中・高校生に対しても、もっと入っていかなくてはならないので実学化していく必要がある。才徳兼備で、徳の方を失わないようにしながら、いかにして才を高めていくかということではないかと思います。

確かな学力というのは基本ですが、学力だけではないと私は思う。徳が磨ける方向は、散髪屋のはさみの使い方一つで、人様の顔を扱うわけですから、細心の注意が必要なわけです。そういうことも人の心をしっかりと鍛えていくし、学ぶことがたくさん出てきます。

そういう意味で、入り口は色々ありますが、学力は必ずしも最初にあるわけではなくて、ある時に学ばないとだめだということに気付いた時に、学問というか、確かな学力の学というものの大切さというものに気付くのですが、常に先にそれがあろうというわけでもないと思いますよ。そういう色々な議論を出してもらって、ブレインストーミングをしながら、システムとして、どこか実験的に、矢野さんが仰ったように、小さく産んで大きく育てていくということで、できるところからやっていくということで良いのではないかと考えております。触発されて申し上げました。

木苗先生に一言いただいた上で矢野委員長お願いいたします。

木苗教育長： 今、皆さんから英語教育といいますか、英語だけではないと思いますが、いろいろいただきましてありがとうございます。

教育委員会でももちろん、色々今その時期が来ています。語学研修では短い人で3週間程度ですが、毎年先生方も200名から300名は海外に送っています。また最近、高校生が一年間海外留学しても単位も読み換えてくれるものですから、留年しなくて良いのですよね。高

校でもそういうようになってきたものですから、それでかなりの人数が行っています。

そういったことで、これは県の教育委員会だけではなくて、ふじのくに地域・大学コンソーシアムとの連携もとっておりますので、大学生と高校生の色々な繋がりもできていますし、それは英語だけではなくて、科学とか、数学、そういうような方面でも随分静岡県は変わってきたのかなという感じはしています。まだ、でも実際にどこの学校にも手が届くかというのと、もうちょっと時間がかかるかなと、そんなふうに思っています。

いずれにしても、今皆さんからお話いただいたことを踏まえて、教育委員会でも留学や海外からの受け入れを積極的に行い、そうした語学研修、それから併せて、ただ英語が話せば良いのではなく、やはり現地へ行かなければ意味がないものですから、修学旅行を含めて海外に送っています。海外へ修学旅行を実施している割合は多分全国でも相当高いです。ただ安全性と考えますと、余り遠くというのは行かないものですから、せいぜいアメリカとか、オーストラリアとか、近くですと台湾とかになります。実は海外へ行く割合は静岡県は日本でトップクラスです。当然日本語は通じませんので、それなりに自分たちが努力するというような環境もかなりできてきました。

そういう点で、皆さんの先程から色々お話をいただいているものをもう少し充実させることによって、一步一步そちらの理想というまでにはいかないですけれども、いわゆる国際的に語れる人になって欲しいと、そんなことでやっております。以上です。

川 勝 知 事： 冒頭うっかりしましたけど、35人以下学級下限の撤廃、ついに令和元年度で完成ということで、これは本当に大きな改革だったと思っておりますが、教育委員会の皆さん方、教育長を含めて本当にありがとうございました。

それから、また教育委員会のおかげで海外への修学旅行の実施率が日本一になりましたね。ですから、パスポートを持っている高校生が多くなったということでもあります。こういう経験は今のシステムの中でもできますから、こういう改良を加えることと同時に何か、先程の伊東地区の学校改変の話ではありませんけれども、新しいことを始めるということが大切で、その新しく実施する中で、どのメニューを育てるかというあたり、焦点を幾つかこのあたりで絞っていただいて、やっていく。

35市町のうち、例えば藤枝ですと、相当IT教育というのが全市的にやっているのではないかと思います。その効果を、近隣の地区を含めて、知ってやっていくことが大事で、一斉に行ったらなかなか難しいと思いますけど、或いは、先程仰った観光学とか、何か地元に着したところで専門家が育ちやすいようなものを始めるとか、寄宿舍

の学校を、小さくなっているまちの高校で始めるとか、1学年全部どこかの、例えば川根本町ですと、ちゃんと矢野委員長も行っていただきましたが、全校で生徒数が30人か40人しかいないわけでしょう。今はインドに留学できるわけですから、あっという間に英語とコンピューターの技術が身につきます。ただし、発音はインド的になるかもしれませんが、どちらにしてもジャパニーズ・イングリッシュで育てるより良いのではないかと思います。

そんなところとしまして、何か言い残されたこととか、確かな学力並びにライフステージに応じた教育について御提言があればいただきたいと思いますが、いかがでしょうか。

では、また藤井さんから加藤さんに順番で。

藤井委員： ライフステージに対応した教育の充実に関して、先程事務局から説明がありました。県の取組事例というのが幾つも紹介されましたが、実は私は内容について知らないことがほとんどでした。ここまでやっているのかというのを再認識させていただいた次第です。

ここで申し上げたいのは、私の認識不足かもしれませんが、一方で宣伝不足ではないかなという気がいたしました。恐らく県民の方々が、資料に書いてある現在県が取り組んでいる様々な事例について、実際どの程度認知しているかということ、ほとんど知らないのではないかと想像をしております。相当宣伝はしているということであれば、御勘弁いただきたいのですが、もし不足しているのであれば、これは積極的に宣伝をすべきだし、もっと言うならば、例えば年金の受給申請に来た人には、全員にこの資料を自動的に渡すようなことでもいいし、各学校で宣伝をするということでもいいでしょう。少なくとも県が税金を使って、これだけのことをやっているということ、やはり知らなければ、なかなか参画する人も出てこないと思うので、是非その点では工夫をお願いしたいと思います。

これに関連して、こういった様々な取組事例に外国人が手を挙げて参画したいといった時に、果たしてどういう制度的な受け入れができるのか、あるいはインフラが揃っているのかという点で、年齢、性別、国籍に関わらず、こうしたチャンスが外国人にとっても与えられているという具体的な仕組みを是非設けていただきたいと思います。そういう間口を広げることによって、色々な意味での多様性というキーワードに繋がるようなことも新たに出てくるでしょうし、あわよくば、人口動態に変化が起こって欲しいなということを思う次第です。以上です。

川勝知事： ありがとうございます。
加藤さん、どうぞ。

加藤委員：先程インドの話が出たので、それこそ今週の土曜日はZOHUの方に菊川ジュニアビレッジに来ていただいて、彼らが作っているCRMを子供たちが使えるようにしようという講座を2時間ぐらいやってもらいます。ですから、大人たちに先んじて、DX（デジタルトランスフォーメーション）を子供たちがしてしまおうということで、CRMを使いながら営業、顧客管理をしていくことと、あともう一つ、これは私の専門ですけど、パソコンが得意な中1の子がたまたまいるので、防犯カメラとか、遠隔監視の仕組みをその子を中心に作ってもらって、どこからでも畑が見られますという状態を、多分1万円もかからずに全部できると思うのですが、そういうのをやります。これが総務省さんの事業を、グローバルデザインスクールという会社になっていますが、依頼等を受けて、菊川と、あと横須賀と柏の葉、千葉県と神奈川県のカ所、今ジュニアビレッジ、浜松も始まっていますが、そこできちっと遠隔監視ができて、みんなで遠隔から千葉の畑も菊川の子も見られて、「やばいんじゃない、あの畑」みたいなことが言い合えるという状況と、営業のCRMも協力できるので、部門が違うという感じで、柏の葉の子が「菊川すごく売れてない？」みたいな会話ができたり、顧客を共有したりとか、「キューピーさん、いっぱい買ってくれるらしいよ」といったら、みんなで営業に行くとか、そんなことができいくのではないかと思います。

私が言いたいのは、学校内で全部やろうとしなくてもいいのかなというのは日頃から思っていて、民間もそうしてやってくれる人、ZOHUさんみたいな方もいるし、場があれば、結構持ち寄って色々なことが、静岡は特に企業さんが多いのでできるので、余り学校に全部やるというよりは、地域と連携して、地域でできることは地域でどんどんやれる人がやれる場を許可、或いは許容していくような、段々それが私たちも学校の中へ入っていき、学校の中でみんなにできるような体制になっていけば良いのではないかと思います。

ですから、学校、教育委員会に変えなければいけないところは変えて、全部やらなくても、外に出しても良いのではないかと感じています。

川勝知事：小野澤委員、どうぞ。

小野澤委員：それは、スポーツの分野もそうですね。部活動に関して、現在エスパルスの方で少し絡んでいます、やはりそういう場が欲しいというか、自分たちだけだとグラウンドに、でも人的なものは抱えているみたいなどころがあるので、何かその辺は学外のところと何か協力できれば、協力したいという人たちがいるのにどう繋げていいのかわからないという、お互い困っている部分がありますから、そういう場が、話し合える場があれば良いと思います。

加藤委員： 小学校は、もう午前で授業を終了しても良いと思います。午後は地域が育てる時間みたいにしていけば良いし、中学校も5時間ぐらいまでで、6時間目から社会に出て行って、それぞれスポーツにいそしみたい子は地域部活で、今、小野澤さんがやられているような感じで出ていけば良いと思います。

小野澤委員： そこに外部の人が入って良いようなハードルだけ下げてもらえれば、多分入れる。なかなかセキュリティーの関係で、外に出されて終わりみたいなどころがあるので。

川勝知事： 渡邊さん、何かありますか。

渡邊委員： お話に乗っかるみたいになってしまいますが、以前もこの場で話題になりました子供たちの放課後の過ごし方ということに関しても、非常に今回のステージに対応した教育というところと親和性が高いと思ひまして、今、子供たちって、部活をやらなければならないと思ひている。実は、部活動というのは参加自由だと言われていながら、実際にはやらなければならないような縛りになっていて、部活等でも、部活でないと放課後活動としてちゃんと認めてもらえないような縛りのようなものが今できてしまっているのて、地域の活動であるとか、様々な学校外のところでの活動に参加しているよということて、外部の大人と何かを作り上げているよというようなことも、ちゃんと自己申告制で放課後活動として評価してあげられるようなシステムというのはしっかり作っていく事で、子供自身の活動に多様性が生まれて、それこそ学力の向上にもつながっていくという可能性を非常に感じました。ですから、そのあたりについては学校側が部活に対する考え方を改めるといふか、徐々に話し合いをしながら、多様な活動の場の用意が必要であると思ひました。

また、外国人がこれから増えていくことはもう明らかで、既に先進的に取り組んでいらっしゃる市町も静岡県にはありますので、これからどんどん県内全ての地域において先進的な取組、例えば夜間中学ですとか、義務教育年齢を超えてから来日した外国人の方々のサポートというものも、手遅れになる前に用意していくという部分が必要かと思ひれます。以上です。

川勝知事： そうですね。実践委員会では、学力テストに関して議論されると先程仰いましたけれども、小学校の学力テストは割と低い方ですよ。一時期は最下位になったと。しかし、それが不思議なことに中学でぐっと上がって、今回もそうですけれども、全ての科目で5位内です。ですから、小学校の時は遊んでいるのでしょ、きっと。つまり、遊べる環境があるということだと思ひます。反対に秋田とか、福井と

か、富山とか、冬に遊ばせませんから勉強する以外にないということで、結果的に体力を培った子供たちが、自意識に目覚めたときに頑張れば、あっという間にトップクラスに行くというわけですから、そういうことを逆手にとれば、小学校は、午後はもっと自由にさせた方がよい御意見がありました。ただ、学習指導要領がございますから、先生方はどのようにしてそれをしっかりと恥ずかしくないように報告できるかと。

だけど、授業料は、教育費は国民が払っているわけですから、それを全部静岡県に戻していただいて、あとカリキュラムは全部静岡県で作れると。私は作れると思います。経済的にはニュージーランドと一緒だし、一人当たりの所得はニュージーランドよりも高いですしね。ですから、そういうことをできると私は思っていますが、まだお上の言うことを、高校も大学も聞かなくてはいけないという状況で、必ずしもお上といいですか、文科省の役人が学力や識見や、いわゆる学徳が高いとは到底言えないと思っていますので、みんなそう思いながら変えられないというのが切歯扼腕するところでもあります。

私は、文科大臣から問答無用と言われて叱られた。しかし、全然相手が、つまり答えに窮して、今学力テストのことについても、相手が自分に応じた形で指導要綱を変えてきたのですから間違っていないですよ、私たちは。ですから、勇気を持って、自分たちの地域の子供たちは自分たちで面倒を見るくらいのつもりでやって良いと思うのですが、ただいきなりはできないと。どうしたらいいかと、そのあたりについていかがでしょうか。

藤井さん、どうぞ。

藤井委員： 先程の小学校は午後遊ばせたら良いとの話、大賛成だし、あるいは部活の話も出てきましたけれども、そのことでちょっと連想するのは、何回か前のこの会議でも申し上げたと思いますが、やはり先生方の価値観というか、先生たちが認識している教師の立ち位置というのをもう一度整理する必要があると思います。

何回か前のこの会議で、先生方の業務の棚卸しをすべきだということをお願いしました。長い教育の歴史の中で、社会の要請、地域の要請、保護者の要請あるいは学習指導要領、色々なものに縛られ、期待され、先生方は一生懸命真面目に、尚且つ優しく全てを受け入れてきたわけです。その結果、多忙であるというのは当然当たり前の話であって、それは棚卸しをしなければ、つまりやらないことを決めて外していかなければ、積み上がったものを改善させようと思っても、それは無理に決まっています。ですから、是非先生方の価値観をそういう意味で変えていくような仕組み、あるいは態勢、努力というものを我々も少し真剣に考えていかなければいけないと思います。

その点で、昨年、未来の学校「夢」プロジェクトで働き方改革に関

してメスを入れたわけですが、あの程度は序の口であって、もっとやりようはあると思います。したがって、先生方の仕事の大幅な棚卸しをすることによって、色々な意味での改善、変革を起こしていく必要があります。その結果、スポーツ塾であったり、学習塾は当然存続するのでしょうけど、他に芸術塾があっても良いでしょうし、先程申し上げた教育産業の育成というのは、そういうところに結びついてくると思います。もっと社会インフラとして、部活動に変わるようなものが産業として成り立っても良いと思う次第です。以上です。

川 勝 知 事： 矢野さん、どうでしょうか。

矢 野 委 員 長： 生涯学習ということ、本当にその通りだと思います。私は以前この場でも発言した覚えがありますが、生涯学習に相呼応する生涯教育の場をしっかりと設ける必要があると思います。

先程、小学生を遊ばせた方が良いのではないかというお話がありましたが、勉強とか、学問とか、そういう意欲に火が付く時期は子供一人一人違うのです。小学校の時に燃える子もいると思います。中学校になってやる気が出る子もいます。高校になってやる気が出る子、大学に入ってやる気が出る子、大学に入っても遊んでばかりいる子もたくさんいます。一方、社会人になって仕事を始めて、これではだめだということで夢中になって勉強する人がいるのです。いつからそういう意欲に火が付いて始まるかは別として、それぞれの時に、やはりきちんとした教育の場があるということが大事だと思います。

加藤さんのお話の中で、東京の大学を出られたのでしょうか、静岡でも学ぶ場があったということが大切です。そのように、その人がやりたいということが出てくれば、必ずそういう場があると、そういう県にしたいと思うのです。

そのように考えてみますと、学校の先生、親もそうですけど、大変だなと思うのです。子供のやる気を出させるにはどうしたら良いのか。これは大昔から大問題で、これだという正解はありませんが、ある日、急にやりたくなってしまうのです。それにはマンツーマンの指導しかないと思います。叱ったり褒めたりして、そうして子供は育っていくと思うのです。そういうことが大前提となりますが、小・中・高・大を通じて子供たちには語彙、つまりボキャブラリーを是非増やして欲しいと思います。

私は、外国でも仕事をしましたが、英語などはきちんと発音もできません。しかし、日本語のボキャブラリーを増やすと、仕事をやる上で、それを英語で何と言うかというのを誰でも調べます。大体それで通じてしまうのです。動詞はtakeとか、haveとか、makeとか、isとか、be動詞とか、そういうのを使えば、言葉などはどうにかなりません。ネイティブスピーカーのように上手に話す必要は全くありません。

ん。それでも私は仕事上、支障を来したことはありません。もっともそういうのは我々がちょうどどうの立った世代だからかも知れません。

私は、中学生や高校生に話をする場が最近増えてきたので、彼らには「皆さんの時代は、外国語は二つ必要となり、一つでは足りないよ」といつも言っています。二つの外国語の内、一つは英語を勉強し、あと一つは、中国語でも良いし、フランス語でもスペイン語でもポルトガル語でも何でも良いが、二つ必要だよと言っています。

子供たちの将来の志望を聞いてみると、世界で雄飛したいという志望の子がたくさんいるのです。とても頼もしいです。それはお医者さんだったり、弁護士だったり、外交官だったり、スポーツ選手だったり、俳優だったりたくさんあります。そのためには道具を磨く必要があります、それは外国語だから、二つやりなさいということを行っています。外国生活をした帰国子女だったら別ですけど、そんなに流暢にしゃべれるわけではないのです。でも、完全に仕事には支障がありませんから、ボキャブラリーとロジック、これがしっかりできていれば良いのです。それを養うのは日本語だと思います。ですから、小学校、中学校、高校、中でも特に小・中において、日本語教育はしっかりとやって欲しいと思っています。わかってもわからなくても、大声で読みますと、日本語の文章とか、文脈というのが頭や心に入ってくるから、そのようにして鍛えたことが外国に行くと役に立つのではないかと私は思っています。

とにかく生涯学習に意欲のある人には、生涯教育の場がいつも用意されている社会が必要です。社会人になって、上手くいかなかった時にもう一回やり直したいという人はいるわけです。そういう人がちゃんと戻ってきて、勉強できる場所がきちんとある県にしたいと思っています。

川 勝 知 事： ありがとうございました。

夜間中学は、外国の方たちのために使いますよね。高校に50になってから入るというのは、今の状況ではなかなか勇気というか、難しいです。高校の飛び級も、制度的にはできますが、今は大学の方で入れてくださらないので、高校3年間はちゃんと行きなさいということになっています。

しかし、大学の方は、生涯学習といいますか、これは一番受け入れやすい教育機関だと思います。ですから、実は若い子でも、中卒から一気に入れるぐらいの、こういうジェットガンというのですか、それも教育委員の伊東先生もそうしたいと、数学がよくできる子は高校3年までの内容も終わってしまっている子もいますから、もう大学に行けば良いと思うのですが、一方、五十の手習いとか、ある時に大学に行って特定のことをやりたいとか、そういう時に大学は社会に開かれ

ていなくてはいけないということで、教育機関、学問機関としてはやはり大学ではないかと思えます。大学コンソーシアムでそのようなシステムに変えていくと、全ての世代に、全ての国籍も含めて、開かれているのがユニバーシティー、ユニバーサルですので、そういうふうに変えていく必要があるだろうと思えます。

それから、学力を立てることも大事ですけど、良き友達に出会うことも大切なので、一人で能力が上がっても、シャイであったり、人見知りしたり、そういうものを克服できる力も持たないといけないので、良き友達に選ばれる、また良き友達を作るというためには、多感な時代が大切ですから、要するに、基本的に良き人間をどのよう育成していくかということで、静岡流といいますか、ふじのくに流といいますか、こうしたことをここで自由に議論ができるようにして、そして今スポーツ分野で始まっておりますが、社会総がかり、地域ぐるみで全体としてみんなで高め合うような文化風土をつくっていきたいと思っております。

今日は、本当に自由な御発言をいただきまして、また体験に基づいたものは非常に説得力のあるお話ですので、そうしたものを広めていくヒントもいただいたような気がいたします。どうもありがとうございました。

それでは、最後は教育委員会を代表して、木苗教育長から一言お言葉をいただきたく存じますということで、よろしく申し上げます。

木苗教育長： 本日は、「生涯にわたり学び続ける教育の充実」というようなことで、皆様から大変積極的な有意義な御討論をいただきました。ありがとうございました。

特に、生涯にわたり主体的に学び続けることができる環境の整備が必要不可欠ですけれども、そのためには、やはり小学校から高等学校にかけて基礎的・基本的な知識、技能とともに、思考力、判断力、表現力を身につけさせるとともに、主体的に学習に取り組む姿勢を養うことは、確かな学力の向上を図るためにも必要と思われれます。

また、色々と御意見ございましたが、各ライフステージに応じた学びの機会を確保する、そういうような環境づくりも必要だと思えます。これからのこれらの取り組みによりまして、生涯を通じて、矢野先生が言われるように、才徳兼備の人材を育む教育を実現できると考えております。

本日の会議におきまして皆様からいただいたもの、私も大学生活が大分長いですし、その後、大学コンソーシアムにも理事も務めておりますので、幼稚園から小学校、中学、高校、大学まで、あるいは大学院まで様々見ておりますけれども、できるだけ静岡方式といいますか、川勝知事も言われるように、積極的に静岡らしさといいますか、固有のものを出していったら良いのではないかなというようにことを言

っていただきましたが、非常に心強く思っております。

今日いらっしゃる先生方もそうですけれども、今日御参加いただいた方々にも色々御協力いただきながら、静岡の教育を強くする、そしてまたグローバルな人材を育成するということで御協力いただけたらありがたいと思います。今日はどうもありがとうございました。

川 勝 知 事： 私の総括とは別にしまして、才徳兼備の徳については、やはりどこかで心得ておかななくてははいけませんね。

先ほど矢野さん、Dream授業に出ていただいて、スポーツマンになりたいとか、俳優になりたいとかあっても、政治家になりたいというのはないのです。なぜでしょうか。嘘をつく人が多いからだと思います。恥ずかしいことをする人が多いからだと思います。ですから、人に迷惑をかけないとか、嘘をつかないとか、恥ずかしいことはしないと、こうしたことはしっかり子供の時から、しっかり叱るだけの勇氣を持たないとはいけませんし、そこが抜けていると、どんなに学力があってもだめですので、才徳兼備として常に我々は静岡流の人材育成に努めていきたいと思っております。

学問の世界は、コピペなんかをちょっとやっただけでも、要するに盗作だとか、この人の言っていることは自分の本当の真理の追求ではないということで、ですから、それはホモサピエンスとして一番の基本のことだと、嘘をついてはいけませんね。もちろん方便というのがありますが、基本的に人を騙してはいけないという事ではありますが、それが横行しているだけに、スポーツだと体ですからごまかしがきかないわけですね、そのとおりで見ているから。それが全力でやると人を感動させて、道徳的にするわけです。自らを鍛えるということですね。そういう才徳兼備の、これが静岡県の基本理念だということで、今日はどちらかというと才の方について御議論賜りましたけれども、そんなにたくさんの徳目があるわけではありません。そうしたことについても、子供たちにどのように植えつけていくとか、育てていくかということも併せてこれから考えていきたいと思う次第であります。

これで進行を事務局にお返しいたします。

事 務 局： 皆様、長時間に渡りありがとうございました。

次回、第3回の総合教育会議は11月27日水曜日10時からの開催を予定しております。

以上をもちまして、第2回静岡県総合教育会議を終了いたします。皆様、お疲れ様でした。